

フリルとレースで飾られた不思議の国のアリスのような服を着た若い女性が、カフェテリアで月刊ラジオライフを読んでいた。カプチーノの泡に描かれた「可愛い子猫」の顔を眉間から断ち切るようにしてかき混ぜる。無惨に歪んだ子猫の顔に唇をつけ、一口飲む。

両耳に合わせて六個、唇と鼻孔に三個のピアスをしていた。首には革ひもと、イミテーションの有刺鉄線が巻かれてある。肘まである白い手袋の手には、ドクロや十字架にコウモリと棺桶をモチーフにした幾つもの指輪が、鱗のようにすべての指にびっしりとはまっている。これでは指を動かすのも困難ではないかと思えるのだが、その指先は手に持った小さな無線機を器用に操作していた。それに繋がれたイヤホンが、銀で縁取られた彼女の耳に差し込まれてあった。

その様子はあまりにも目立ちすぎており、まさか彼女が極秘で尾行を行っている人間だと気づく人間はいない。

猫のような杏型の目がきらりと輝いた。

レコーダーの録音スイッチを入れる。小さなメモリの中に、男女の睦言が刻まれていく。

紫で縁取りした黒い唇が、笑みの形に歪んだ。

通りを一本挟んでビジネスホテルがある。そこに消えた男女を盗聴していたのだ。ホテルに入るところも、チェックインするところもデジカメに収めてある。証拠は完璧だ。

「ピロ！」

言って、レコーダーを持った手を挙げた。

「ははっ」

どこにいたのか禿頭の中年男が忽然と現れた。黒い革製のロングコートを着ている。明らかにマトリックスでキアヌ・リーブスの着ていたコートを真似た物なのだが、腹が出た肥満体型の中年男にはかなり無理がある。身長がかなりあるのが、まだ救いだと言えようか。

「ピロ、それで全データ揃ったわ。報告書を作成して、ボスに送ってちょうだい」

「わかりました」

レコーダーを受け取ると、コートをマントのように翻して中年男は去っていった。

「これでまた一組の男女を引き裂くことになったわ。地上的な恋愛などすべて滅びればいいのよ」

ふふ、と鼻先で笑った彼女の名は皆川香織。

誇り高きボスの乙女「ロリーター」である。

## 第一話 愛と猟奇

1

皆川香織が探偵社のバイトを始めたのは去年の夏休みのことだった。ファミリーレストランから高級料亭まで、全国展開のチェーン店をいくつも有する株式会社「タベル」の会長皆川楽市の孫として生まれてからこの歳まで、彼女は一度としてバイトというものをしたことがなかった。金持ちだからバイトをしなかったのではない。彼女の父

親である株式会社(タベル)取締役社長皆川幸四郎は、彼女に働くことの面白さを教えようと、幼い頃から一所懸命バイトを勧めていたからだ。それでも彼女が頑なにバイトをしなかったのは、彼女に大きなこだわりがあるからだった。

彼女の一生をかけた大きなこだわり。それがゴスだ。

ゴスは本来、建築や美術、文学などの様式の一つ、ゴシックの略である。建築、文学、美術史の、それぞれで使うゴシックという単語は、意味も異なり指し示す物も違う。が、そのどれもに共通するのは、暗黒への志向であり、正当より異端を愛する歪んだ美意識である。

ゴスとは、普通そのゴシックから生まれたカルチャーのスタイルを指す。サブカルチャーの一つのジャンルだと言ってもいいだろう。しかし香織は、自らを十九世紀から綿々と連なるゴシックの正当な後継者と呼んでいる。暗黒と恐怖を我が物とし、耽美にして露悪、崇高にして淫靡、異端の美へすべてを献げる異形の天使、それが皆川香織なのである。いや、自分でそう言っているだけのことではあるのだが。

それでもとにかく、彼女にとってゴスは人生そのものであり、ゴスとしての美意識から外れるということは、精神的な死を意味するのだ。

そうになると、安易に笑顔をO円で売るような接客業をするわけにもいかない。個人的には死体洗いや怪しい新薬の人体実験とかを望んでいたのだが、さすがにそんなバイトが簡単には見つかることはなかった。

そしてたまたまマンションのポストに入っていたチラシで、探偵社がバイトを募集しているのを知ったのだ。

探偵と言えば明智小五郎。猟奇と怪奇の江戸川乱歩作品となれば、これはやはりゴスの美意識にぴったりなのではないか。

そう思って、香織は日下部探偵社を訪れたのだった。

古いアパートの五階にあるごちんまりとしたオフィスに、いたのは三人。

社長の日下部俊太郎と二人の探偵。社員はこれですべてだった。そんなことを気にすることもなく、真の猟奇の探求者として働きにきましたと、香織は意気込みを述べた。日下部はあっさりとなんな彼女を採用した。単純に人手が足らなかったのである。

そうして得た香織の仕事は書類の整理や録音してきた会話の採録。さらにはみんなの食事の手配からお茶汲みまで。まさに雑用、どう見ても雑用、誰が考えても雑用、まったくの雑用ばかりであった。猟奇の欠片もそこにはなかった。

香織は三日で厭になって辞めようとしていた、その時だ。

たまたま香織が一人で留守番をしているときに、その依頼者はやって来た。かなり草臥れた表情の中年女性だ。もともとは上品でかなりきれいな顔立ちをしているのだらう。が、頬が瘦け、目の下にはくっきりと隈が出来、やつれきって水分の欠片もない顔になっている。

まだ誰も戻ってきていないので、と香織が連絡先だけ聞こうとしたら、勝手に彼女から話を始めた。

「私はある大手出版社の編集者をやっております。あれは半年前のことになるのですが、ある作家の担当となりまして、それで」

「あなた、結婚されてるわよね」

言葉を遮って言った香織の鋭い視線に、思わず目を逸らせながら女は答えた。

「えっ、はい、そうで」

またもや最後まで言わず、香織は言った。

「不倫だ」

えっ、と女は顔を上げた。

「その作家にも妻はいる。にもかかわらず、あなたはその作家と寝た」  
「どうしてそのようなことが……」

女は絶句した。

香織が鼻で笑う。

「世俗的で類型的な出来事だからよ」

「……はあ、それで、その作家が、その」

「プレイの問題だわ」

またまた女の喋るのを遮り、香織はきっぱりと言った。

「プレイって……」

「愛し合っている最中に、その作家はあなたに何かを命じるか、あるいは何かをする」  
ぽっかりと口を開いて、女は香織を見た。

「どうして、どうしてそんなことまで」

「男の要求はどのようなものですか」

香織は何もかも見通すような視線で、女を射抜いた。

「えっ、まあ、あの、それはつまり」

たちまち女の顔が紅潮する。

香織は託宣「たくせん」するがごとく厳かきで、女に告げた。

「あなたが恥じれば、その途端にそれは恥ずかしい行為となる。あなたのしたことは、それは恥ずべきことなのですか」

「それは……」

「それは？」

女は何かを決意して顔を上げ、香織の目を見つめて、言った。

「彼がその最中に、私の首を絞めるようになったのです」

「その作家がですか」

「ええその作家がです」

「それはつまりプレイですね」

「プレイというか……彼によると、それは死を賭けた本当の愛の行為だとか」

「愛」

香織の瞳に光が灯った。

黒い唇が笑みに歪む。

「本当の愛、ですか」

「はあ」

「あなたは、それが真実の愛だと言いたい」

「いえ、あの私が言っているわけではないのですが」

「言い訳無用！」

怒鳴られ、女の身体が椅子から十センチほど浮かんだ。

「……す、すみません」

おそらく二十歳は年上であろう女性が、香織の迫力に気圧され頭を下げた。

「いいですか。よく考えてご覧なさい。あなた方のような醜い中年男女が真実の愛だと主張しているんですよ」

「醜い、って……」

流石に抗議しようとした女の唇を、香織は立てた人差し指で塞いだ。

「良いこと。醜いのは単に容姿の問題ではないのよ。その通俗的な生き方を言っている

の。世俗は世俗であるが故に醜いものよ。わかったわ。私が死に相応しい真実の恋愛とは何かをお教えしましょう」  
「いえ、あの、そうではなくてですね、私は調査をお願いしようと思ひまして」  
「調査」

鼻で笑う。

「そんなことが必要なではありません。あなたに必要なのは美意識。耽美と退廃こそが恋愛の真実。美しくない物は恋愛とは呼べないのよ！」

「そう言われても」

「反論をするな！」

すっかり雰囲気にもまれた女は、つい、またすみませんと謝った。

「わかればよろしい。ハンス・ベルメールも言っています。反省している人をもっと追い込むのは良くないのでやめましょう、と」

「え、ベルメールがそんなことを」

「じゃあ、種村季弘」

「じゃあ、つて……」

「些細なことにごだわるよりも、問題は真実の愛よ」

「そうでしたっけ」

「そうなのよ。迷いは禁物だわ。さあ、行きましょう」

「行きましようって、あの、どこへ」

「永遠へ」

答えると女の腕を引き、香織は部屋から出ていったのだった。

2

女の名前は入谷由佳（いりやゆか）、四十二歳。一流出版社の編集者であり、家では三人の子供の母親である。男の名は村田喜久次郎、五十五歳。長編恋愛小説『恋する位牌』でデビューしてから現在に至るまで、一貫して恋愛を描き続ける作家である。

さて、問題はこの喜久次郎である。

一週間前の金曜日。

午前四時に百十番通報があった。警官が駆けつけると、ベッドの中に喜久次郎の妻、小雪が死んでいるのが発見されたのだった。死因は頸部圧迫による脳死。早い話が絞殺であった。その場で惚けたようになっていた喜久次郎は、警察に自分がやったのだと伝え、即座に逮捕された。

喜久次郎は妻との交情の際、首を絞めたと自供している。

が、由佳はそれは有り得ないと思った。なぜならその日は喜久次郎と密会していたからだ。精も根も尽き果てて帰ったのが午前三時。二人が宿泊したホテルから喜久次郎の自宅まで、タクシーで飛ばしても五十分はかかる。それから十分間で交情の果てに首を絞めたとは、帰るときのごったたりした様子から見ても有り得ないというのが、由佳の意見だ。もちろんそのことは警察に伝えたが、死亡推定時刻に喜久次郎がその場にいたのは間違いなく、交情の果てかどうかは別にして殺人であることと彼が犯人であることは間違いないと説明された。

しかし由佳は喜久次郎が犯人ではないことを信じていた。かくして由佳は、喜久次郎の無実を証明すべく日下部探偵社に向かったのだったが、何故か、香織のマンションへと連れてこられたのだった。

「こんな事をしている場合じゃないんです」

ここまで連れてこられてようやく我に返った由佳は、その時初めて探偵社に来た理由を説明し始めた。

冷笑を浮かべて聞いていた香織は、由佳が長い話を終えると同時に言った。

「駄目だ駄目だ駄目だ。そんな俗っぽい話の延長で殺人ですか。痴情のもつれですらない、単なるプレイの失敗。変態として未熟者であるだけのことじゃないですか。それのどこに耽美があります。猟奇があります」

「いや、ですから、別に耽美とか猟奇とかはなくても、っていうか、私は喜久次郎さんが犯人だとは思っていないのですけども……」

香織は岩をも射抜きそうな視線で、由佳を睨んでいた。

「耽美と猟奇なしに殺人などあり得ないだろうが！」

「だからですね、これは殺人などではなくてですね」

「じゃあ、愛などと言うな。伊藤博文も言っている。退廃の香りなき愛などあり得ない、と」

「嘘ですよ。それは絶対に嘘ですよ」

「嘘は淑女のたしなみよ！」

大きく溜息をついて、由佳は俯いた。

溜息と共に大きな何かを諦めたようであった。

「大丈夫」

香織はがっくりと落ちた由佳の肩を抱いた。

「まずは弁護士を通じて面会できるように取りはからいましょう。ピロ！」

「はい、ご主人様」

ベランダから、黒のロングコートを着た禿頭の中年男が現れた。

「すぐに村田喜久次郎と面会できるようにセッティングしてちょうだい」

「かしこまりました」

男は切れのいい動きで半回転して、コートの裾をふわりと広げてから部屋を出ていった。

「あれは……誰ですか」

「ピロよ。私の三つの僕（しもべ）のうちのひとつなの」

ピロ、こと大林宏重（ひろしげ）は、株式会社ヘタベルの元北関東統括本部長であり、ゴスロリ姿の香織を見たときからゴスに憧れ、ゴスの道に残り少ないその人生を掛け、香織の僕となることを決意した男なのだ。

引退したとはいえ超一流企業 株式会社ヘタベルの北関東統括本部長であった彼のコネを使えば、殺人犯に面会することなど簡単なことだった。

そして今、こうして香織は面会に来ているのだった。ゴスロリ仕様の香織を相手に、喜久次郎もどこか落ち着かない。

「あまり時間がないので。ズバリお聞きしますね。あなたは奥さんとやってる最中に首を絞めて、そのまま殺しちゃったのですか」

喜久次郎は陰気な顔で香織を見上げた。

「違う、断じて違う。私が何をしたにしろ、それは愛ゆえのことだ。そんな、やっちゃってどうのといった下品なことではないのだ。至高の愛を理解できない者にはまったくわからないと思うがね」

けつ、と香織は小さな声で言った。

聞こえたのか聞こえていないのか、不機嫌そうに喜久次郎は話を続けた。

「理解したくば、来月発売の月刊『文藝実話』に詳しい手記が載っているから、それ

を読んでから来たまえ」

俯き黙って聞いていた香織が顔を上げた。

その鋭い眼光に、思わず喜久次郎の方が目を伏せた。

「わかったような気がします」

誰に言うとなく、香織は言った。

「何がだ」

「その前にちょっと質問を」

「何だね」

「たとえば、あなたは、天井裏から奥さんを覗いたりしたことがありますか」

「なんでそんなことを」

「したかどうかを聞いているのよ」

「あるわけがないじゃないか、そんな変態行為」

びくり、と香織のこめかみが脈打った。

「それじゃあ、手作りした椅子の中に入り込んで、奥さんに座ってもらったりはしましたか」

「だから、そんな事をするわけがないじゃないですか。馬鹿馬鹿しい」

「したかどうかだけ答えてください」

香織は殊更にゆっくりと言った。

「してません」

むっとした顔で喜久次郎は答えた。

ああ、と呟き、香織は頭を抱えた。

全然まったくちっとも猟奇じゃない。

俯き黙り込んだ香織を見て、至高の愛云々の台詞に感銘を受けたと思ったのか、急にニコニコしながら、喜久次郎は言った。

「ところで君は、どうしてそんな恰好をしているんだい。そんな恰好さえしなかったら、君も可愛いのに」

おそらく、喜久次郎にとって、それはお世辞だったのだろう。と同時に「素直におなり。素顔の君は美しい」的な口説き文句でもあったに違いない。

しかしそれは、香織に対しては禁断の言葉だったのだ。もともと白い顔が、怒りのあまり蒼白になって頭蓋骨がうっすらと透けて見えた。

ゆっくりと、香織は言う。

「そんな恰好ですって」

物理的な力を持っているのではと思えるほどの眼力で、喜久次郎を睨んだ。だが喜久次郎も負けてはいなかった。というより、その目を、熱い自分への想いの表現であるうと勘違いしていた。

「そうさ、そんなみっともない恰好をして、君は自分を守ろうとしている。私にはそれがわかってるんだ」

ぶつぶつぶつ、と太いザイルが千切れるような音がした。香織がキレた音だ。すでに彼女の我慢の限界を超えていた。

「ゴスをなんだと思ってるんだ！」

立ち上がり、怒鳴った。いや、咆吼した。

衝撃波に大気が歪んだ。

さすがの喜久次郎も、彼女が喜んでいないことに気づいた。だが、彼はまず、ゴスという言葉を知らなかった。

「ちよっと待ったお嬢さん」

「黙れ、黙れ！ 黙って聞け！」

ものすごい勢いで、香織は喜久次郎にゴスの心を説き始めた。その崇高な精神を叩き込もうと説教した。が、鉄板を爪で搔くような、何一つ相手に伝わっていない感触に、苛立ちばかりが募った。そしてとうとう、最終的な結論を下したのだった。

「わかったわ」

ぽかんと香織を眺めている喜久次郎を見つめながら、溜息を一つ。

「あなたの俗っぽさは充分すぎるほどわかりました。あなたは、あの日帰ったら、奥さんに浮気のことを咎められた。ついでにいつもはおとなしい奥さんが、あなたを罵った。あなたはかっとして奥さんの首を絞めた。ただそれだけの、三流週刊誌のコラム記事にもならないような通俗的な事件だった。そうよね」

喜久次郎から血の気が失せる。

色のない唇で、喜久次郎は呟いた。

「どうしてそれが」

「あなたのような年齢のあなたのような傲慢で自分勝手な男であれば、従順な女でないと結婚しないし、自分より格下だと思っているそんな人間に反論されると、途端に逆上するに決まっている。この絵に描いたような俗人ぶり。二時間ドラマの脇役にもなれない』どこかで見たとようなどこにでもある人物』があなたよ。あなたに出来る犯罪は『かっとして手を出しました』程度の動機が関の山。痴情の果ての殺人など夢の夢。気の弱いあなたは、殺してしまったことを知って動揺し、すぐに警察に連絡した。ところが、その後には考えた。浮気を咎められて殺したなんてかっこわるい。究極の愛を追求した結果だということにすれば出版社も食いついてくるだろう。手記でも小説でもベストセラーが見込める。しかも殺人とはいえ自首しているのだし初犯だし、刑期はそう長くはならないだろう。上手くいけば数年で出てこられる。その時に充分印税で暮らしていけるぞ。そうだとも。浮気を責められかっとして、などという動機ではない。大作家村田喜久次郎が究極の愛を追い求めた結果の殺人なのだ。愛ゆえに殺す。真実の愛を貫いた、この男の姿を見よおお！」

最後は喜久次郎が取り憑いたように絶叫して、香織の長い話は終わった。

「はあはあと肩で息をつき、喜久次郎を見る。」

「そうだったんだろう、喜久次郎」

「老刑事のような口調で言った。」

「はい」

がっくりと肩をおとして喜久次郎は答えた。その倍ほど肩を落として香織が吐った。

「白状の仕方まで俗物過ぎるっ！ もう少し悪に徹することは出来ないのか。それがどうしたと居直ることも出来ないのか。根っからの小者にして俗物」

香織は頭を掻きむしり、きいいと叫び声をあげてから、独り言のように呟いた。「こうしてここであなたを前にしているというだけで気分が悪くなる。魂が穢れる。こうなったら仕方ない。最後の手段です。あなたを猟奇の世界へと導くには、言葉では無理。我が皆川家に代々伝わる秘術を使うしかないようね」

脇に置いていた鞆を、膝の上に載せる。

「こんなこともあるうかと、用意してきて良かったわ」

小声で言うくと、香織は喜久次郎を見て微笑んだ。

「すみませんけど、ちょっとこちらに顔を寄せてもらえません。ちょっとだけ内緒のお話がありますの」

あれだけ怒鳴られ説教されたにも関わらず、喜久次郎はニヤニヤしながら、中央にあるアクリル板へと顔を近づけた。そこには、声が良く通るように小さな穴がいく

つも開けられていた。ちょうどそこに、喜久次郎の唇があった。

香織が顔を近づけた。

何を勘違いしたのか、喜久次郎はさらにアクリル板へと顔を近づける。

香織は靴から金属製の注射器を取り出した。

一瞬の出来事だった。

アクリル板の穴から差し込んだ注射針は、喜久次郎の唇を割り、口腔へと侵入、舌へと突き立った。

あつという間に薬液が注入される。

「いでっ」

慌てて喜久次郎は顔を離した。

その時には注射器は靴の中だった。

ニヤリと笑い、香織は言った。

「今貴様に撃ち込んだのは、我が皆川家秘伝の薬液〈猟奇の種〉。やがて身体の中で芽吹いて心と身体に働きかけ、貴様を真の猟奇者にしてくれようぞ。その時に恥じるが良いわ。いかに今の貴様が中途半端な犯罪を犯した、中途半端な人間か。そしてそのような中途半端な人間にも関わらず、恥ずかしげもなく愛の深淵を覗いたかのような言辞をそこかしこで吐いていたのか。今の鈍感極まりない貴様の心では感じ取れぬ羞恥を、真の猟奇者となったときに思い知って、布団を掴んで夜中中のたうちまわるが良い」

時代が掛かった台詞を一気に述べると、香織はすくつと立ち上がり面会室を出ていった。

3

今こそ皆川家は株式会社〈タベル〉の経営者一族として有名であるが、もともとは江戸時代、將軍のお毒味役を二百年に渡って代々司っていた家柄なのである。

皆川家の人間は、あらゆる料理の味を知っているだけでなく、混入される可能性のあるあらゆる薬物の知識も持たねばならなかった。つまりお毒味役とは医者と料理人を兼ね備えた役職であり、その性格上毒殺を初めとする様々な謀略にも関与し、歴史の裏で暗躍してきたのである。

その皆川家で代々受け継がれた禁断の秘技の数々は、現代に至るまでずっと継承されていたのだった。そして香織こそが、その正当な後継者であった。

〈猟奇の種〉。

これも皆川家に伝わる秘伝の一つである。

その効果は抜群であった。

村田喜久次郎は脱獄したのだ。

彼は拘置所にいた肥満漢を薬殺。その腹を裂いて中に潜み、救急車で逃走したのだった。

その目的は最愛の人間である入谷由佳の誘拐と殺害。

そして誘拐の時刻を指定した予告電話を掛けてから、警察の包囲網をかくぐぐり、見事に由佳を連れ去った。停電と双子の使用人、そして顔中を包帯で巻いた謎の宅配配達人を使った誘拐トリックが解き明かされるのは、由佳のバラバラ死体が花火で打ち上げられた後の事だった。

そして未だに喜久次郎は逮捕されていないのである。



かくして、香織は探偵社のバイトを続けることを決意した。

この世に俗人の犯罪がある限り、皆川香織の活躍は続くのだった。

ゴス。それは生き方。

ゴス。それは宇宙。

香織を讃えるゴス仲間たちの歌が、その日も夜の静寂にこだまするのだった。

第一話了